

発刊にあたって

昭和55年に「優良米の早期開発試験」が発足し、7年間の努力を経て、食味水準の向上については、所期の目標を凌駕する成果を得て、昭和61年度に終了したところです。とはいいいながら、極良食味の府県品種との差は依然として大きく、更に一層の努力奮闘が期待されました。

その期待に応えるべく、優良米の早期開発試験プロジェクトチームは、前7カ年の成果を土台とし、改善すべき点には改良を加えて、発展的に試験を継続することとなり、「優良米の早期開発試験」のいわば第Ⅱ期としての位置付けで、「高度良食味米品種の開発試験」が、昭和62年度より7カ年計画でスタート致しました。府県産米に匹敵する高度良食味品種の早期開発を目標に、ほぼ前期と同様に、①育種規模の拡大、②沖縄、鹿児島県の暖地利用あるいはバイオテクノロジーの一つである薬培養活用による育種年限短縮、③食味関連特性分析機器活用による早期世代での品質選抜をはかりながら、プロジェクトチームの総力を挙げて早期開発に当たりました。平成5年度で本課題は終了しましたが、この間「きらら397」(昭63)、「ハヤカゼ」「ほのか224」(以上平成元)、「彩」(平2)、「ゆきまる」(平5)の5品種が育成され、北海道の奨励品種として採用されました。これらの品種の作付割合は梗全体の49%強を占め、北海道の主要作付品種として定着しており、北海道産米の食味水準向上と安定生産に大きく寄与しているものと確信しています。

時あたかも平成5年12月、長い間懸案となっていたガット・ウルグアイ・ラウンドが決着をみ、日本は平成7年より6年間、米の部分自由化を受け入れることとなり、一層厳しい稲作情勢の下に置かれることとなりました。北海道産米は国内産米との産地間競争に加えて、外国産米とも太刀打ちできる良食味米の安定生産に、更なる努力をせねばなりません。そのためには、「高度良食味米品種の開発試験」が引き続き発展的に継続され、1年でも早く所期の目標に達することが強く望まれるところです。

このようなことから、本課題の終了に当たり、7年間の「高度良食味米品種の開発試験」の経過と成果を広く関係の皆様にご供しうよう、資料としてとりまとめた次第です。北海道稲作の一層の発展のために、本資料を活用していただければ幸いです。

平成7年5月

北海道立中央農業試験場長

野村 信 史

編集及び執筆者

編集委員長

佐々木 多喜雄

副編集委員長

竹 川 昌 和

編集委員

佐々木 一 男 谷 口 健 雄 前 田 博
佐々木 忠 雄 新 橋 登

執筆分担

佐々木 多喜雄	上川農業試験場	I-1~3
竹 川 昌 和	中央農業試験場	III-1~4
前 田 博	"	II-2-(1)-2)、II-3-(1)-1)、II-3-(1)-2)
佐々木 忠 雄	"	II-1-(1)-1)
本 間 昭	"	II-3-(1)-2)
田 中 一 生	"	II-2-(1)-1)、II-3-(1)-4)
太 田 早 苗	"	II-3-(1)-1)
吉 村 徹	"	II-1-(1)-1)
谷 口 健 雄	"	II-3-(2)-2)
柳 原 哲 司	"	II-3-(2)-1)
佐々木 一 男	上川農業試験場	II-1-(1)-1)、II-1-(1)-2)
新 橋 登	"	II-2-(1)-4)、II-3-(1)-2)
丹 野 久	"	II-1-(2)-1)~4)
木 内 均	"	II-1-(2)-1)~4)
稲 津 脩	"	II-3-(2)-1)
沼 尾 吉 則	道南農業試験場	II-3-(1)-1)、II-3-(1)-2)